

京都大学	博士（工 学）	氏名	Titin Fatimah
論文題目	A Study on Community-based Cultural Landscape Conservation in Borobudur, Indonesia (インドネシア・ボロブドゥール地域におけるコミュニティ主導による文化的景観保全)		
（論文内容の要旨） 本論文は、インドネシア・ボロブドゥール地域でコミュニティ主導による景観保全型のルール・ツーリズムが実現している実績を通じて、「文化的景観」の保全を主体的に担う住民コミュニティの組織のあり方とその活動進展プロセスについて論じた研究であり、7章からなっている。 第1章では、建築・都市等に関わる文化遺産の新概念で、住民の生業・生活と自然条件の関係性を重視する「文化的景観」についてその保全課題に関する議論を整理した上で、ボロブドゥール寺院遺跡の周辺農村群からなるボロブドゥール地域の研究対象地としての位置づけを行っている。さらに、コミュニティ主導の実績分析のために、有志住民により地域レベルで設立される citizens' organization と村単位の village community からなるコミュニティの2層構造に着目すること、寺院遺跡のごく周辺に集中する従来型観光ではない景観保全型のルール・ツーリズムがボロブドゥール地域に現れてきた経過と2層のコミュニティ構造との関係を明らかにすること、当該経過が文化的景観保全に与える影響を評価することを論文の目的として定め、論文の構成、詳細調査の実施方法を述べている。 第2章では、考古学・社会学・地質学分野等にみられるボロブドゥール地域に関する既往研究のレビュー、および公表されている保全計画のレビューを行っている。既往研究によって近年明らかになった景観の特徴を整理した上で、保全計画において寺院遺跡エリア外には現在まで有効な計画が示されていないことを指摘し、コミュニティ主導による保全の必要性和意義を位置づけている。 第3章では、ボロブドゥール地域レベルにおける citizens' organization の活動実績に着目し、詳細調査から1980年代から現在までに存在した17組織を見出したうえで、それらの活動期間、活動内容、組織間関係の変遷プロセスを解明している。このプロセスはインドネシアの経済危機（1997年）、寺院遺跡近傍における大型商業施設開発計画の発生（2003年）、同開発計画の撤回（2005年）の3時点によって区分される4フェーズに対応していることが明らかになり、とくに大型商業施設開発計画の是非が議論された期間（第3期）に、議論の機会を主催する複数組織の出現、異種組織間の関係の多様化が生じ、これを通じて開発計画撤回と景観保全型ツーリズム重視の方針が組織間に拡大するに至ったことを解明している。さらに第4期の現在、この多様化した組織間関係が継続する中で、村の景観保全を支援する組織の活動が行われていることを指摘している。 第4章では village community に着目し、景観保全型のルール・ツーリズムを住民の設立した組合により運営する実績をもつチャンディレジョ村をとりあげ、ルール・ツーリズムが安定して運営されるまでの village community の主導性を検証している。チャンディレジョ村における village community の構成組織への詳細調査により、従来は2001年に国内の有力 NGO の支援でルール・ツーリズムに着手したとされて			

京都大学	博士（工 学）	氏名	Titin Fatimah
いた通説に対し、village community 主導による生活・生業の改革が 1980 年に遡ることを指摘し、その後現在まで、環境改善と自然条件に適合する新農業の導入（1980～1990 年）、文化振興によるコミュニティ活動の強化（1991～1998 年）、ルーラル・ツーリズム開始（1999～2003 年）、組合設立によるルーラル・ツーリズム自立運営（2003 年以降）、の 4 段階の village community の活動進展プロセスが認められることを明らかにしている。このプロセス全体を通じて village community の構成組織の過半数以上の連携がみられ活動内容に即した役割分担関係がみられ、組合についても同様に構成組織の連携が組み込まれていることを詳細にわたって解明し、village community の主導性が 20 年以上の実績を伴って継続していることを明らかにしている。 第 5 章では、2010 年時点でボロブドゥール地域で実施されている village tour の全事例の内容を把握した上で、これに関与して village community の活動が行われていることが判明した 7 村（チャンディレジョ村を含む）をとりあげ、各村の village tour 開始期における組織間関係を分析している。開始期とは景観資源調査等のルーラル・ツーリズムの実施に至る準備的活動からなる期間で複数年を要するが、全 7 村において準備的活動に複数の village community の自主活動が含まれ、citizens' organization の参画が顕著になる 2003 年以降に活動が活性化した経過を明らかにしている。この分析を通じ開始期において観光ガイドが先見的役割をもっていた村が複数存在したことから、2010 年時点で village tour を手掛けている観光ガイドへの全数調査を行い、その 82% がボロブドゥール地域出身者であり、76.5% が寺院遺跡のみに限らず地域全体を知る観光を自ら志向していることを明らかにしている。以上から、各村とも開始期に village community と citizens' organization の両方が関与し主導するプロセスがあることを確認しコミュニティ主導によりルーラル・ツーリズムが実現されたことを示している。 第 6 章では、第 5 章でとりあげた 7 村について、ルーラル・ツーリズムによる景観への影響評価を行っている。評価は、village tour の活動規模・内容の村域に対する親和性、開始期以降に生じた空間的変更に着目して行い、それらのオーバーレイ分析を行っている。これにより、景観を修復するような変更が生じていると同時に、村域の一部のみが village tour 対象地になっている場合に従来存在しない小規模新規施設の設置がみられることを指摘している。これらからルーラル・ツーリズムの景観への影響に関するコミュニティの対応可能性を論じている。 第 7 章では、各章の成果を踏まえて、ボロブドゥール地域において景観保全型のルーラル・ツーリズムが、citizens' organization と village community がそれぞれの活動進展プロセスを経た上で相互に連携が生じることによって実現したことを指摘している。また、そのルーラル・ツーリズムは、citizens' organization と village community の活動進展プロセスの途上で景観保全が意識化された後に実施されていることを明らかにしている。			

氏 名	Titin Fatimah
-----	---------------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、インドネシア・ボロブドゥール地域において景観保全型のルーラル・ツーリズムを実現させた住民コミュニティを、ボロブドゥール地域レベルで有志住民により設立される citizens' organization と村単位の village community からなる 2 層構造のコミュニティとして捉え、コミュニティの構成組織の活動実績と組織間関係の動的な進展プロセスを詳細調査によって明らかにすることにより、文化的景観保全をコミュニティ主導に依拠して進め得る可能性を論じたものである。得られた主な成果は次のとおりである。

1. ボロブドゥール地域レベルで 1980 年代以降 17 の citizens' organization が存在し、その活動実績は 4 つのフェーズからなる進展プロセスをもち、とくに 2003 年に生じた寺院遺跡近傍における大規模商業施設開発問題を契機とする議論のフェーズを通じて組織間の連携が多様化し、同年以降に顕在化するルーラル・ツーリズム実現への開始期をその連携の上で支援することとなったプロセスを解明した。
2. village community の活動進展プロセスに関して、従来 NGO の支援により 2001 年にルーラル・ツーリズムを実現したとの通説があったチャンディレジョ村について、そのプロセスは 1980 年まで遡り、環境改善・農業改革から始まり組合設立によるルーラル・ツーリズム自立運営に至る 4 段階、20 年以上のコミュニティ主導のプロセスがあること、プロセス全体に village community の構成組織間の連携と柔軟な役割分担関係が伴っており、組合もその組織間関係が反映されていることを明らかにした。
3. 現在のルーラル・ツーリズムは、全てその開始期において citizens' organization と village community の準備的活動が行われており、それぞれの活動の進展プロセスの途上で景観保全が意識化された後にツーリズム実施がなされていることが、景観保全型の実施内容に反映しているとみられることを示した。
4. 以上から、citizens' organization と village community からなるコミュニティの 2 層構造に着目することで、同地域のコミュニティ主導による活動進展プロセスと景観保全型のルーラル・ツーリズムの実現の関係を解明した。

以上のように、本論文は、コミュニティ主導の実態を構成組織の実績と組織間関係の動的プロセスに着目して示したもので、住民コミュニティに依拠して文化的景観の保全を進める方法論を提示したものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 2 月 21 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。